



# 天使の悩み 2

～ 苦しんでみたいなあ～

ver 1.0

じーこ 澤田



苦  
痛  
海

… 天使は悩んでいました。

「どうしたらあんなに、上手に苦しめるのかな？」

「何だ、なんだ。弟よ。  
何をまた悩んでいるんだ？」

「あっ、お兄ちゃん。  
教科書に書いてあったんだけど、人間界ではみんなもの凄く  
苦しんでばかりいるじゃない。・・・なんて？」

「だから、それは前にも言っただろう。  
人間は不幸を見つける天才なんだって！」

「それは、この前に聞いたよ。よく分かったつもりだけどさ。

でも、教科書にはこうも書いてあったよ。

『人間は生まれる前に自分の人生を取り巻く環境を  
選んで決めている。』って。

そうなんてしょ。素敵な人生を歩むために、そんなに万全の準  
備ができていのに、何で苦しめるのか不思議なんだよ。」

「あ～、そういう悩みか。

そのことはもう少し上の学年になって、重要な秘密を習わな  
いと分からないんだなあ。」

「何、それ何？」

「まあ、いいか。他でもない弟のためだ。教えてやろう。  
あのなあ、人間はな、自分の人生を取り巻く環境を・・・、  
たしかに生まれる前に選んで決めているよ。

「けど、人間界に誕生した途端、生まれる前に決めた記憶を一切忘れてしまっただよ。」

「え〜っ!!。どういふこと。何で忘れちゃうの?みんななの?」

「そうだよ、みんな何も覚えていないんだ。それが人間界に生まれるために守らなきゃならないルールなんだよ。」

「なんて〜!? びっくりだな。 どうしてなの?」

「苦勞するためさ!」

「へっ? 意味わかんない??!」

「だからな・・・、つまり・・・。」

我々、天使たちが住んでいるこの『あの世』では、思った事は何でも思い通りに実現する・・・、幸せ一杯の世界だろ。

でも、それってずっとそのままだと『退屈だなあ・・・。』って、お前もこの前に言っていたじゃないか。」

「うん、言った言った。もう少し期待を持たせてくれれば、感動も大きいのになあ・・・って、思ふことあるよ。」

「そうだろ。」

これまでもそう思つた天使はたくさんいたんだ。そんな風に思つた天使たちが、わざわざ苦勞を経験しに行くために創られたのが、・・・『人間界』なわけだよ。

いくら全て上手くいくシナリオを、生まれる前に書いているとはいえ、そのまま事がスムーズに運んだら、思い通り過ぎて人間界に行った意味がないだろ。」

「あっ、そうか。確かにそうだね。」

なかなか思い通りに行かない経験をしに人間界に行ったのに、自分で作ったシナリオを知っていて、全て思い通りだったら、この『あの世』にいるのと同じだね。」

「そういうこと。」

だから、生まれる前に作った完璧なシナリオも、自分で作ったこと自体を忘れるようになってるんだ。

さらに、思い通りにならない人生を経験するために、わざわざ人間界に行ったことも、覚えていないようになってるんだよ。」

「ふ～ん、そういうことか。だから人間は人間界であんなに苦しんでいるんだね。じゃ、期待通りなんだ。」

「そう！ そういうことさ。」

人間界で生きている人間にとっては、決して期待通りだとは思えずにいるけどね・・・。(笑) でも、本当は全て期待通りに、『思い通りにならない人生』を楽しんでいるんだよ。」

「そういうことか。変な仕組みだね。」

「変な仕組みと言えば、変なんだけど、退屈しないための方法としてはかなりスゴイ仕組みになってるんだぞ。」

「まあ、そうだね。  
でもさ、そんなのいつか誰かが気づいちゃうんじゃないの？」

「そうだよ。気づいている人はたくさんいるよ。  
でも、そこはまた人間界って上手くできているわけさ・・・、

『そんなことはあり得ない』『そんなこと証明できないじゃないか』と、記憶を忘れていることを信じていない人がたくさんいるんだよ。

だって、なかなか思い通りに行かないように、人間界は作られているからね・・・。(笑)」

「そうか、ほんと上手くできているんだね。」

「そういうこと。」

「でもさ、生まれる前に決めたシナリオ通りに上手くいくように、  
そのために必要な才能を使いこなせる『体』を、  
ちゃんと選んで生まれてるんでしょ。」

「そうだよ。」

「それなら、じきにその才能で、どんどんうまいくから、  
苦しまないんじゃないの？」

「いや、いや。そこもちゃんと考えられているんだ。

自分の大切な才能を人間は使わないんだよ。」

「えっ、なんで？」

「体にインプットされている、その人生で必要な才能を、人間は小さい頃から使って能力を発揮し始めるだろ。」

「うん、だってそういうシナリオになってるんでしょ。」

「そう。けどな・・・、小さい頃から当然のように出来たことは、本人にしてみると、『当たり前』すぎて、せっかくのその大切な才能を、「大したことじゃない!」と思いこみ始めるんだよ。」

「え～、せっかく選んで持っていった才能なのに・・・、もったいないなあ。」

「そうなんだ。もったいないと思うだろ。

でも、人間界に生まれる一番の目的は何だった？」

「・・・ 思い通りにいかない経験をするってこと？」

「そのとおり!! だからこそ、なかなかうまく事が運ばないように、その才能を使いたくなくなるようになってるんだ。」

「おお、すごい! でも、どんな感じなの？」

「例えばな、こんな感じだ。」

とても温厚しい、コツコツタイプの人がいるとするだろ。

あまり華やかな事はせず、目立つアイデアを出すわけでもないけど・・・、周りの人に言われたことを、毎日コツコツとやり続けることが出来る才能をその人は持って生まれているわけだ。」

「うん、うん。そういう人っている。大切な役だよね。」

「そう思うだろ。」

でも、その本人にしてみると、周りの仲間のように、自分独自のアイデアを出したり、目立つようなプレゼンをして、みんなをあとと言わせてみたいと、常に思っているんだ。

自分の『コツコツ毎日同じ事をする才能』なんて、誰にでも出来る・・・、どうって事のない才能だと思ってしまうんだよ。」

「え～、もったいない」

「そう、ホントもったいないだろ。」

このタイプの人、生まれる前に選んだ人生は、

周りにいる華々しい活躍をする人たちを、陰で支える縁の下の力持ち的な生き方なわけじゃない。

そのために必要な『コツコツタイプ』の才能を持って生まれているわけさ。



周りにたくさんいる、華やかな活動をする人達は、本当は自分を活躍させてくれるためにいるのに、その人達のことを皮肉にも羨ましくなってしまうんだ。

みんなに比べて、自分の持って生まれた才能が、  
どうって事のない才能だと思えて仕方なくなるんだな。」

「ものすごい演出だね。」

「そう、ものすごい演出さ! ..で、どうなると思う?

みんなのようになりたくて..、

必死にアイデアの出し方を学んだり、上手なプレゼンづくりのセミナーなんかに参加したりして、

時間やお金をそのために割くことになるから、いつも忙しくて、お金がなくて、自分らしくない..、思い通りにならない人生を手に入れることになるんだ。」

「あっ、ほんとだ。

ちゃんとうまくいかないうようになってるんだね。スゴイね。」

「そう、うまくいかない体験をできるように人間界はできているから、そのルールにそって動いて、ちゃんと上手く事が運ばないようになっているんだよ。」

「ものすごく巧妙に人間界ってできているんだね。」

「そういうこと。だんだん、お前も分かってきたな。」

「うん、ものすごく分かってきた。

じゃさあ、生まれる前に作ったシナリオのように、  
もし人間界で上手く事を運ぼうとしたら、どうすればいいの？」

「いい質問だね・・・、

得意なことをすればいいのさ。」

「得意なこと・・・、みんなそれをやろうとしてるんじゃないの？」

得意なことを作ろうと思って、みんな勉強をしたり、セミナーに  
行ったりしているんでしょ？」

「それは、ちょっと違うんだ。

得意な事というのは、生まれた後に身につけたり、覚えるもの  
の事じゃなくて、

元々自分に備わっている『当たり前にてできること』の事なんだ  
よ。」

「当たり前なこと・・・か。」

「そう。例えば・・・、部屋のそうじが得意な人っているだろ。

そうじ好きな人にとっては、そうじは『当たり前』のことだろ。」

「そうだね。そうじなんかみんな誰でも出来るし、そうじなんか  
できて偉くもなんともない・・・と思っているかもね。」

「上手く事を運ぶには、別に偉くなる必要なんてないんだ。  
自分の持って生まれた才能を発揮するかどうかなんだ。」

『部屋のそうじ』って言ってしまうと、そんなこと・・・って思うかもしれないけど・・・。

『部屋のそうじ』が得意な人の本当の才能は、

- ① 繰り返し同じ作業を正確に出来ることだし、
- ② 細かいところに気配りの出来ることでもある。
- ③ 要るものと要らないものを感情に流されず的確に判断して見極める能力にも長けているだろう。」

「それって、すごい才能だね。」

「そうだよ。」

「じゃあ・・・、『人に言われたことを淡々とやる人』っているじゃない。そう言う人は、どんな才能を持って生まれているの？」

「そうだな。 まずは『そうじ』の人と共通するところで、

- ① 繰り返し同じ作業を正確に出来ることが挙げられるな。

それから、

- ② 相手が望んでいることを正確に捉えて、期待に応じて相手を喜ばせることが出来る。
- ③ 様々な難しい事を期待されたときにも、その時の状況に適應していく能力を兼ね備えているとも言えるね。

このタイプの人、レベルを上げていくと、相手が予想していなかったことも付け加えて、期待以上の事をして相手を喜ばせることが出来るようになることが多いね。」

「すごいね、それって。」

「すごいさ。」

「一見、華やかな役割じゃないけど、このタイプの人たちがいなかったら、華やかな事をしている人たちも、継続して活躍することが出来ないわけだよ。」

「ほんとだね。」

本人にとっては、当たり前と思っている才能にも、それぞれ凄い持ち味があるんだね。」

「そう、なかなかそのことに気がつかないように人間界はできているけど、

そのことに気がついたら、持って生まれた『当り前の才能』を使うことが、周りの人の役に立ち、周りの人に評価されることだと分かっちゃうんだ。」

「うん、よく分かるよ。」

「つまり、得意なこと・・・というのは、持って生まれた『当り前の才能』を使うことなんだよ。」

その才能を必要としている人たちがたくさんいる環境を、

ちゃんと生まれる前に選んで生まれているのだから、その『当たり前前』の才能』は必ず重宝されるようにもなっているんだ。

当たり前前のレベルを上げたら、引っ張りだこになることは請け合いだろ。」

「なんだ。人間界もやっぱりうまくいくようになってるんだね。」

「そりゃ、そうだ。」

同じ宇宙に存在していて、同じ創造主が創ったんだから、基本のルールはこの「あの世」と同じさ。

ただ、そのことに気がつきにくいように、人間界はなっているわけさ。そのためにも、記憶を忘れるルールがあるんだ。」

「そうか。納得だよ。」

「『当たり前前』に満足できないで、もっと自分ができるようになるろうと、みんな頑張っちゃうだろ。」

それで、みんな得意なこと以外をやっちゃうんで、うまくいかないようになっているんだよ。

そう考えると、得意なことを見つけるためには、自分のことをじっくり深掘りして、自分を知ることが大切だって事が分かるね。

「自分を認める・・・ってことかな。」

「そう。

人間界で上手く事を運ぶためには、生まれ持った『当たり前  
の才能』を使い込んでいただけなんだよね。  
とってもシンプルだろ。

『当たり前』の才能』を使い込めるように、その才能を活用して  
くれる自分とはタイプの違う人が周りにいる環境を選んでもい  
るわけだからね。そここのところに気がつけるかどうか・・・だな。」

「すごい仕組みだな。人間界ってホントにおもしろそうだね。  
やっぱり一度自分も行ってみたいな。」

「天使大学で資格を取れば行けるさ。  
将来、一緒に人間界に行ってみようぜ。」

「行く、行く!

どんな人生を体験するか、今からシナリオを考えてみようか  
な。

ワクワクするね。

兄ちゃん、今日もありがとう。とっても楽しかったよ。」

「よかった、よかった。今日も幸せ一杯の一日だったな。」

## 【あ と が き】

この物語はフィクションです。

天使がいるのか、いないのか・・・なんて、実際自分も分かりません。見たことないですしね。

「あの世」があるかないかも、生きている我々には、いくら議論を重ねても分かりようのないことです。

でも、自分はこんな風に考えています。

例え多少の無理があるように思える考え方でも、自分で思い込むのは自由です。他人に迷惑をかけるわけでもなく、自分がラクになれるのであれば、そんな考え方を採用してみても良いのではないかと思います。

この小冊子を読んだ方も、「ちょっといいかも」と思えて、気持ちがラクになるのであれば、この物語のような考え方を採用してみてもいいかがでしょうか。

「絶対に受け容れられない」と思うのであれば、このまま忘れてもらうのが良いと思います。

自分なりの心穏やかにいられる考え方、生き方を増やしていけるといいですね。

最後までお読み頂き、本当にありがとうございました。

じーこ（澤田宏二）



☆人生ドクター☆じーこ 澤田 Koji Sawada

心のケアのできる絵入れ歯専門医  
心育てのリアルアイセミナー

<http://souireba.com/>  
<http://jikolize.com/>

**2012年12月5日**